

血中ウイルス遺伝子量を指標とした牛白血病対策 の取組（第1報）

中丹家畜保健衛生所
田中優子 八谷純一

【はじめに】近年、牛白血病の発生は全国的に増加傾向にあり、府内でもと畜場等での発見が増えている。また、管内酪農家の成牛全頭（23戸1,164頭）の抗体検査では約7割が陽性であった。こうした状況を踏まえ、本病の清浄化に向け血中ウイルス遺伝子量（以下、遺伝子量）を指標とした対策に取り組んでいるので、その概要を報告する。【方法】本病の対策に意欲のある自家育成主体の酪農家4戸をモデル農家として、遺伝子量の多い順に全頭のランク付け（A～C）を行い、A、Bランク牛の計画的淘汰及びA～Cランク牛分離飼養、子牛への感染防止のため加温処理又は陰性牛の初乳給与、直検用手袋等に起因する人為的感染防止について、各農家が取組める範囲で対策を実施した。また、加温初乳等給与子牛の遺伝子量検査を実施した。【取組状況】A、Bランク牛は、各農家3～5割程度であったが、淘汰等により2戸の農家で減少。1戸で分離飼養を実施。子牛への加温初乳等給与は3戸で実施し、給与子牛の遺伝子量検査で陰性を確認。人為的感染防止では、直検用手袋の使い回しを行っていた2戸が中止した。【今後の対応】遺伝子量の検査は、本病の対策を行う上で有効と考えられ、今後、対策の成果を他農家に示し、モデル農家数を増やしていくこととしている。